ボクな君と俺な自分

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクな君と俺な自分

【Ｎコード】

Ｎ６１５１Ｙ

【作者名】

Ｋ＝Ｓａｙｕｔｏ

【あらすじ】

中学二年の６月に来た転入生はボクッ娘でロリ要素満載でおっちょこちょいな女の子。

そんな君と俺の運命的な出会いでもなんでもない出会いから始まる不思議な事も起こる日常物語。

更新は不定期、下手で初心者ですがお許しください。

プロローグ（前書き）

特に目標も無く勢いだけで思いついた小説ですがこれは全力で書きます。え、何故かって？そりゃ、俺はロリでボクッ娘が大好きだからですｗｗｗ

プロローグ

「ぼっ、ボクは十六夜（いざよい）　夕姫（ゆうき）です。こっ、これから二年間、よっ、よろしくお願いします」

黒板の前にセーラー服を着た女の子が先生の横で恥ずかしそうに自己紹介をしている。

「えーっと、十六夜の席は。おっ、慎二（しんじ）の横が空いているな。よし、あそこに座りなさい」

「はっ、はいっ！！」

そして、女の子は右手と右足を同時に前にだしバランスを崩して盛大に転んだ。頭をぶつけたらしく頭をさすりながら俺の横まで歩いて来て席に座る。

それは運命的な出会いでもなんでもなく、ただただ平凡な出会いだった。

登場人物（前書き）

まだこれから先も登場人物は追加して行く予定です。

登場人物

坂上（さかがみ）　慎二（しんじ）
男　１３歳　１９９６年　１０月１０日生まれ
本作の主人公。特にこれと言った特徴もない平凡な中学生。強いて言うなら、硬式テニス部に所属しており、強さは現３年生にも劣らない。両親は既に他界していて一人で一軒家という贅沢な暮らしをしている。

十六夜（いざよい）　夕姫（ゆうき）
女　１４歳　１９９６年　５月１８日生まれ
本作のヒロイン。ロリでボクッ娘でおっちょこちょいな女の子。中学生にしては身長は低すぎる方で、まない（ｒｙ
成績は相当いい方で腰までかかるサラサラな黒髪が特徴的。

加藤（かとう）　優作（ゆうさく）
男　１３歳　１９９６年　１２月１日生まれ
慎二の親友。髪を茶色に染めていて不良そのものだが実は優しい奴。成績は見た目通り馬鹿だが勉強以外なら頭はいい。
慎二と同じテニス部に所属しているが監督に嫌われているため試合に出してもらった事がない。

水越（みずこし）　美幸（みゆき）
女　１３歳　１９９６年　７月４日生まれ
慎二の幼馴染。成績は平均。
慎二の事をいつも思っているが中々告白できずにいる。部活は新聞部でカメラと手帳はいつも持ち歩いているが写真の７割は慎二が必ず写っている。

白井（しらい）　香奈恵（かなえ）
女　１５歳　１９９５年　４月２５日生まれ
慎二が通っている学校の生徒会長。成績は常にトップでさらに容姿端麗なので告白された回数はゆうに２０回を越す。何故か妙に慎二に突っかかる。

佐藤（さとう）　楓（かえで）
男　１３歳　１９９６年　１１月７日生まれ
慎二の友達。成績はいい方。”わしゃ”や”～じゃ”などの口調で話す。
剣道部で全国大会の常連。

宮代（みやしろ）　疵夢（きずむ）
男　１３歳　１９９６年　６月６日生まれ
同じ学年のモテ男。成績優秀容姿端麗だが同性には嫌われて居るとても嫌味な奴。大抵の女は宮代にデレデレになるが一部例外あり（十六夜、水越、白石、ｅｔｃ．．．

泣く君と約束する自分

「ねぇねぇ、夕姫ちゃんのタイプってどんな人？」

「夕姫ちゃんってどこから来たの？」

「何人家族なの？」

「彼氏とかいるの？」

転入生恒例の質問攻めだ、多分何処の学校でもある事なんだろう。そう思いつつ、十六夜の俯いてる顔を隣の席から覗いて見る。すると、十六夜の目はうるんでいる事に気がついた、そして目には雫が溜まっているのが見えた。

（嘘だろ、質問攻めされただけで泣くなんて）

恐らく重度の人見知りなのだろう、しょうがないから俺は助けてやる事にした。

「あ、先生だ！」

その一言で、皆がそれぞれの席に飛びつく。その時を利用し俺は優作に紙切れを投げつけ夕姫の手を取り屋上に駆け込む。紙切れには”夕姫は気分が悪くなったので保健室に連れて行ったって誤魔化しといてくれ”と書いてあるので大丈夫だろう。

夕姫をフェンスのそばに立たせ、ハンカチを渡す。

「ほら、涙拭けよ」

十六夜はゆっくりと受け取り目に溜まった雫を拭き取る。

「あ、ありがとう・・・ございます」

「タメでいいよ。えーっと、あいつらは別にお前を困らせようと思ってたわけじゃないさ、ただ、転入生だからってので興味持ってんだよ」

「わ、わかってます。でも、怖いんです」

そう言う十六夜の肩が震えている事に気がついた。

（どーっすっかな、今は逃げれたけど戻ったらまた質問攻めだろうしな）

俺は考えを巡らせたがいい解決方法が見当たらなかったのでここから見える山の事を話す事にした。

「なぁ、あの山知ってるか？」

「え？えっと、ごめんなさい、わかんないです」

急に振られて驚いたようだった。

「あの山は子牙（しが）山って言うんだけど、前に友達と行った事があるんだけどそいつがちょっと寝てる時に少し離れた木のそばに隠れたんだ。それで少したったらそいつが起きるんだけど周りに誰もいないって分かると大号泣したんだよ、可哀想になったからすぐに出て

行ったら今度はすごい怒って殴られまくったよ、あれは痛かった」

「クス・・・」

「お、笑ったな」

俺がそう言うと、急に頭を下げ。

「ご、ごめんなさい」

「な、なんで謝るんだ？俺はお前に笑って欲しいから話したんだけど」

「ごめんなさい、前の学校で笑ったりしたら怒られて。それで叩かれて・・・」

「それって、イジメじゃないか。先生とかには言ったのか？」

「うん、言ったんだけど証拠がないからって無視されちゃった」

「なっ！？」

証拠がないからっておかしいだろ、本人が虐められてるって言ってるのに。

「だから、ボク、他人と関わるのが怖くって」

「だから・・・泣いていたのか？」

十六夜は無言で頷く。

「だから、ボク一人ぼっちのまま今まで過ごして来たんだ。今まで、そしてこれからも一人ぼっちなんだボクは・・・・」

「そんな事ない、現に俺は今お前と居る。この学校にだっていい奴は沢山居る。もし、いじめられるような事があったら俺が守ってやる」

こんな事を女の子に言うのは自分でもキザだと分かっていたでもそれが俺の本音だった。

「だから俺とお前は今日から友達だっ！！」

「ーーーっ！！」

その言葉を聞いた瞬間に十六夜の目には大粒の雫が幾つも溜まり、流れて行った。

「ひっぐ、ありがとう。ボク、えっぐ、友達って、言われたの、初めてだ」

俺はそんな十六夜に「一緒に友１００人作ろうな」と言ってやった。

「うんっ、ボクは十六夜　夕姫、呼び方は何でもいいよ」

「わかった十六夜、俺は坂上　慎二、俺も何でもいいや」

嫌味なモテ男と救世主な幼馴染（前書き）

とっても恥ずかしい事ですが、一部分の台詞が抜け落ちていた事に気がつき修正しました。

嫌味なモテ男と救世主な幼馴染

俺と十六夜はあの後教室に戻りいろいろと誤解を解いた後、十六夜は俺の親友の優作とはどうにか話せる程度まで行ったが、何故か俺と話す時よりも生き生きしていない気がした。

「ところでさぁ、あの時本当は何処行ってたの？」

あの時、俺が十六夜を連れて行った時だろう。確かに優作には誤魔化してくれって伝えたので保健室に行っていない事はすぐにわかる。

「ちょっと屋上にな」

「まっ、まさかお前告ったのか」

「何故そういう結論に至った？」

「屋上＝告白かと」

そう言って優作は親指を立てる。

「お前の思考回路は一般人とずれている」

「ほぅ、よくわかったな。そう、我こそがこの世界の、ってあー、無視しないで～」

俺は優作の会話を無視して立ち上がる。

「なぁ、十六夜、俺は食堂いくけどお前もいくか？」

「うんっ！！」

十六夜は満面の笑みで肯定する。

優作も顔に”誘ってくれぇー”とマーカーペンで書かれていたので誘ってやった。食堂へ行く途中にかなりの視線を感じた気がしたが気のせいだろう。

ここの食堂は実にメニューが豊富で和食、洋食、中華、イタリアンと揃っている。そのせいなのか異様に高い。

俺たちは一番奥の方に空いてる席を見つけそこに座る、昼食どきだから食堂は沢山の生徒で賑わっている。

取り敢えず優作に席を確保して置いてもらい俺と十六夜は食券の販売機まで行く。

「俺は・・・・、オムライスにするかなっと」

「ええと、ボクは・・・やっぱいいや」

十六夜はそう言って、開きかけていた財布を閉じる。その時。

（見えたっ！！）

勿論パンＴなどでは無く財布の中身である。動物の顔をした可愛らしい財布の中は１００円玉１枚と５０円玉１枚だけだった。自慢するつもりではないが俺の視力はとある民族にも劣らないほどいい

のだ。

「十六夜はこの中で選ぶとすると何が好きなんだ？」

「ボク？ボクはえっとー、やきそば、かな・・・・へ？」

俺がやきそばのスイッチを押して出てきた食券を渡してきた事に驚いたらしい。

「ほらっ」

「あ、ありがとう。また今度返すね」

と言っていたが、俺は。

「いいよ、俺の奢(おご)りだから」

「でっ、でも」

「ほら、交換しに行くぞ」

そう言って俺は受付の方へ歩き出し、十六夜もそれに続く。

俺はオムライスを受け取り同じくやきそばを受け取った十六夜と一緒に席に戻る途中に食堂へはいる人影を見た、その直後。

「きゃー、宮代君よぉー」

と言う女子の声を合図かのようにそこら辺に居た女子がそいつに集まってく。

「まぁ～た、あいつか」

俺が席に戻ると優作はそう言った。

「坂上君あの人誰ですか？」

という問いに答えたのは何故か優作だった。

「モテ男だよ、モテ男。しっかも嫌味な感じなさ。どうしてあんな奴がモテるんだろうねぇー」

「おや、僕の悪口を言うのは出来の悪くてクズな加藤とかいう一人称を持った平民君じゃぁありませんかぁ」

「なんだ、てめもっかい言ってみろよ」

「優作やめとけ」

俺は優作を抑えそう言った。

「おやおや、そちらの坂上と言う平民は中々な出来のようですね。そこのクズよりは賢いようですね」

「勘違いすんな、お前みたいなクズに手を出して暴力事件にでもなったらどうしようも無いからな。一応言っておく、俺もお前が大っ嫌いだ。親友をバカにされて気分が悪い、とっとと去れ」

「ふんっ、類は友を呼ぶ。その通りですか。別に僕はあなた達に用はありません。あるのはそこの可愛らしい女性です」

そう言うと宮代は左手で十六夜の右手首を取り、右手を顎(あご)の下に置く。

「は、離してっ」

「おや、嫌がるところが一段と可愛いですね。お持ち帰りしちゃいましょうかね」

そう言って宮代は嫌がる十六夜の右手を引っ張った。その時、俺の堪忍袋(かんにんぶくろ)の緒が切れた。

「おいっ、てめぇのその汚れた手で十六夜に触(さわ)ってんじゃねぇ」

そう言って俺は宮代の胸ぐらを掴んで十六夜から引き離した。

「おや、そんな事をしていいんですか？これであなたは停学ですよ」

そう言って宮代はあざ笑っていた、ある人物が話すまで。

「ところがどっこい。私、あなたがそこの女の子を無理やり連れて行こうとしていたところを運悪くカメラに捉えてしまってー。ほら、中々の写真写りでしょ？これならはっきりと誰だかわかりますねー。さっすが私のカメラちゃん」

その声の主は、俺の幼馴染の美幸だった。

「えっとー、ロリコンのモテ男がロリ系女子を襲おうとしたところ正義の救世主が助ける。っと、これはいいネタですねー」

「き、貴様これで済むと思うなよ」

そう言って、宮代は去って行く。

「美幸、助かったよ」

「えへへ、これも私のスキルのお陰ですね。今度ケーキでも奢ってくださいねっ」

「まぁ～た、お前は慎二にたかるのか」

「優作君にはカンケーないでしょ。ところで、その子は？」

その子、とは十六夜の事だとすぐにわかった。

「こいつは十六夜　夕姫、転入生だ。それでこっちは水越　美幸、俺の幼馴染で隣のクラスの新聞部だ」

「転入生でしたかー、よろしくね夕姫ちゃん」

「ボクこそよろしくお願いします。えっと坂上君を助けてくれてありがとうございます」

「きゃー、ボクッ娘なの？ボクッ娘なの？可愛い」

そういい美幸は十六夜を抱きしめる。十六夜は「ひゃー」と言いながら小さな抵抗をしている。

「ところで、慎二君はまたオムライスですかー。ほんっと、好き

ですねぇー」

十六夜を解放して、俺に言ってくる。

「まだ、忘れられないんですか？」

「・・・・」

「だんまりですか、言いたくないならいいです。でも、”私にも”それと同じ気持ちが未だにあること忘れないでくださいね」

そう言って、美幸は去って行く。俺はしばらくそこでうつむいていた。

「坂上君？」

俺はその声で正気に戻った。

「あ、いやなんでもねぇ。もう冷めかけてるから早く食べようぜ」

「うんっ」

そして俺はいつも通りオムライスを頬張る、あの時の事を思い出しながら。

運動音痴な君と運動神経抜群な自分

結局、宮代の所為でオムライスは冷めてしまっていた。

「それにしても、あいつ何時からああなったんだかな」

あいつとは勿論宮代の事である。

「慎二あいつの昔の事知ってんの？」

「あぁ、昔はあんな嫌味な奴じゃなかった。多分今のお前と同じくらい中が良かったと思う」

「まじかよ」

「何時からそうなったんでしょうか？」

十六夜が首を傾げながら聞いてくる。

「思い当たる節は・・・・一つだけある。でも今はまだ、話せない」

「そうですか」

「あー、やっべもう昼休みおわんぞ」

優作がそう言ったのを聞いて俺は慌てて時計を見る、授業が始まるまで後二分だった。食堂は二階で俺たちの教室は一階でちょうど食堂の真下だった。

（いつものルートを通ればギリギリ間に合う）

そこまで考えたところで、十六夜の頬に青海苔（あおのり）が付いてる事に気がついた。

「十六夜、青海苔付いてるぞ」

俺はそう言って、青海苔を取った。

「ひゃぁ！？」

何故か十六夜の頬に俺の指が触れた時に顔が赤くなった。

（多分青海苔がついていたから恥ずかしかったのだろう）

青海苔を取った時に指が頬に触れたのだが柔らかくて気持ちが良かった・・・とこんな事を考えてる場合じゃない。

「優作、いつものルートな」

「おっけー」

そう合図を交わした後に俺たちは窓から飛び出し俺たちの教室の窓の前に着地したがある事を忘れていた。

「さっ、坂上君」

「あっ！」

そう、十六夜を忘れて来てしまったのだ。

「十六夜、飛べっ」

「ムムムム、ムリ、絶対無理」

「慎二、俺は逃げる」

優作はそう言って親指を立てて窓から教室に飛び込む。

「逃げるなぁ～」

「ぼっボクどうすれば」

「十六夜、飛べっお前なら飛べる・・・・・じゃなくって、俺が受け止める、俺を信じろ」

「わ、わかったボク、信じるよ」

十六夜は意を決して飛び降りる。そして俺は着地地点に先回りして受け止めるがバランスを崩して倒れた。見事十六夜を受け止めた俺だが、その格好は少しまずかったと思う。何故なら今俺と十六夜は抱き合ってるような感じになって居る。そして、十六夜の決して大きくはないが確かに存在するその胸にある小さな膨らみが俺の胸板に当たっていた。

「さ、坂上君大丈夫？」

そう言う十六夜の顔は俺の顔のすぐ目の前にあり、吐息が少し生温かった。

「十六夜、乗っかられてると動けない」

「あ、ごめんなさい。すぐにどくから」

そう言って十六夜は俺の上からどいて俺の横に立った。その後俺も直ぐに立ち、十六夜と一緒に教室に戻った。その後の授業は全て集中出来なかった。

ホームルームも終わり、これから部活だ。

「十六夜は部活とかどうするんだ？」

「坂上君は何部に入ってるの？」

「慎二は俺と同じテニス部だよ」

「テニスかぁ、ボクにも・・・出来るかなぁ」

「俺は出来るか出来ないかの問題じゃなくって、やろうと思うかそうじゃないかの問題だと思う」

と俺が言ってやると十六夜は急に顔を輝かせて。

「ぼっ、ボク見学したい」

とこんな会話の後、俺たちは今テニスコートで練習中だが、十六夜は何と言うかものすごい運動音痴であった。

ボールは全て空振り、サーブも空振りで百発百中で頭に落ちる、

おまけに試合形式で一年生とやらせたところ全て※サービスエースで完敗であった。

「うぅ、ボクはやくも挫折しそうだよ」

「十六夜あんなに落ち込むなよ、初めっからうまくできる奴はいないさ」

「坂上君は始めてやった時はどうだったの？」

泣き目で十六夜に聞かれる俺だが流石にその答えを言ってしまうと悪いので嘘を言おうと思ったのだが。

「慎二が始めてやった時は中学一年生の時で、その時に部長に完勝してたよねー」

「あ」

優作が余計な事を言ってしまい、俺は恐る恐る十六夜の顔を見てみると。

「坂上君のばかぁ～」

と十六夜は泣ながら俺の頭をポカポカと叩いていたが全く痛くは無く寧(むし)ろその行動が可愛く見えた。

「ボクやっぱテニス部はいいや」

「そっか」

その後にすぐ部活は終わり俺たちは部室に戻り着替え始めた。

※サービスエースとは相手がサーブしたボールに触れる事が出来なかった時の事です。

お隣同士の君と自分

帰り道、十六夜を真ん中に俺と優作がサイドに立つ感じで帰っていた。

「ボク、今日はとっても楽しかったよ」

「そりゃ良かったよ夕姫ちゃん」

「十六夜は何で前の学校で虐(いじ)められてたんだ？その、こんなに可愛いのに」

「ボボボボッ、ボックがかかかいいいいわっわけけけなないじゃじゃん」

そう言う、十六夜の顔は耳まで真っ赤だった。

「なんだ、夕姫ちゃん慎二に照れてんのか」

「てれれてれてなないー」

十六夜はそう言って優作を突き飛ばす。が優作が突き飛ばされた場所は急斜面でそのまま転がり落ちてった。

「うわぁぁぁぁぁぁーーーーー」

「ご、ごめんなさいっ」

「大丈夫だ、あいつにはM要素がある」

「あ、よかったー。じゃぁこれからもこんな事していいんですか？」

「バリバリおっけーだ」

そこまで行ったところで優作が斜面を登って来た。

「おいコラ、誰がMだ」

俺は無言で優作を指差す。

「だーーーー、もうっ。俺そこ右だからじゃあなー」

「おうまた明日な」

「バイバイ」

そうして優作が抜ける。十六夜は急に無口になり俯く。まだ耳は真っ赤だった。

「は、は、はハックション」

「十六夜大丈夫か？」

「大丈夫、でもちょっと寒い」

俺は何か十六夜をあっためられるいいものはなかったか考えて見たがなにもいいものは持ってなかったので、俺は十六夜の肩に手を

回し抱き寄せた。

「なっ、なにするの」

「いや、こうすれば暖かいだろ？」

「う、うん」

でもなぜか俺は少しドキドキして来ていた。俺が前を向いていると十六夜はじっと俺の顔を見ていてそれに気がつくと俺が十六夜の方をみると一瞬目が合うが十六夜がすぐに顔をそらす。

「あ、ボクここだから」

そう言って十六夜が止まった家は俺の家の隣だった。

「え、俺の家。そこなんだけど」

「え、隣！ねぇ、も、もしかして部屋ってあそこ？」

そう言って十六夜がさした部屋は二階の一番十六夜の家よりの部屋だ、そこは俺の部屋だった。

「ま、まぁ」

「うそ、ボクの部屋、あそこ」

そう言って十六夜がさした部屋は俺の部屋のすぐ横で窓からお互いの部屋の中が丸見えだった。

「まじかよ。あっ、十六夜帰ったらすぐカーテン閉めて俺がいいって言うまで見ないでくれっ」

俺は自分の部屋が散らかっていた事を思い出した。

「う、うん」

十六夜が返事した後に俺は急いで家に入る。

「ただいまぁ」

俺はそう言うがおかえりは言ってくれなかった。いや、正式には”言ってくれる人はもういなかった”が正しいだろう。俺にはもともと兄弟はいなかったし、両親は俺が小さい時に他界した。

「さってと、急いで片付けないとな」

俺は階段を駆け上がり自分の部屋に入って掃除を始めた。

お姫様？な君と担ぐ自分

「これで、ラストぉぉぉ」

そして足の踏み場もなかった部屋は完璧に片付けられた。よしっ、そしてカーテンを開けるとその向こう側には両手で頬杖をしてこちらを見ている幼い顔があった。

「あっ、坂上君やっと終わったんですね」

「えっと、もしかして帰ってからずっと待ってた？」

「まぁ、そんなとこかなー」

十六夜がえへへーと笑いながら言う。

「わりぃ、ずっと片付けしてた。えっと、お詫びに今度どっか連れてってやるよ」

「ほんとっ、じゃぁボク、その・・・に行きたい」

声が小さくて一部分が聞き取れなかったのでもう一度聞いた。

「え？どこだって？」

「だからボク、・・・に行きたい」

「わりぃ、聞こえないぞ」

「だっかっらー、ボクは坂上君のお家に行きたいぃー」

今度は大声で叫んだ、直後に十六夜の顔は真っ赤になり俺の位置から見えないところに隠れた。

「いざよーい？」

「ううぅ、言っちゃった」

「十六夜？」

「おやすみなさーい」

「なんだ？」

十六夜はカーテンを閉め電気を消した本当に寝るようだったので俺も寝る事にした。

「さっかがーみくーん、あっさでーすよぉー」

俺はその声で目が覚めた。

「あぁ、十六夜おはよう」

「なんか、男の人起こすとボク彼女みたい。・・・・っか、彼女っ！？ごめんなさいボクそんなつもりじゃ」

「いや、それはいいんだけど」

あくまで俺はそんな事謝らなくていいんだけど、と言う意味で行ったのだが。

「えっ、ボクなんかが彼女になっていいの？」

（こいつ、美幸以上に勘違いしやすいタイプか？）

美幸も鋭い事は鋭いが勘違いもしやすかった。しかしそれ以上に今上を向いて、ぽわぁ～っとしている十六夜も勘違いしやすかったようだ。

「十六夜、あんまりぼーっとしてると遅刻するぞ」

「へ？もうそんな時間？」

十六夜も時間に気がつき慌てて準備を始めた。だが俺は前日に用意は済ませてあるのですぐに準備ができ十六夜の部屋を覗いてみるとまだ準備をしていた。

「十六夜、俺はもう家を出るがお前はどうする？」

「ボクもいま準備できたからいま行く」

よし、これなら普通に間に合うだろう。俺はそう思い先に出てるぞと言って十六夜の家の前に来て待っていると。

ーーードカドカドカ、グリッ・・・・ドッカーンーーーと謎の効果音がして数秒後に十六夜が出て来る。

「あはは、階段から落っこちちゃった」

そう言う十六夜の顔は引きつってた。

「怪我したんじゃないか？」

俺がそう言うと、まっさかーと言って大きく右足を出した途端に。

「いったぁぁぁい」

と十六夜が倒れそうになったので慌てて受け止め、足を確認した。すると足首が骨に異常がああるんじゃないか？と言うほどまでに腫れていた。

「おいっ、十六夜大丈夫か？」

「ボク痛くもないしなんともないっ」

あくまで否定するか、だったら・・・。俺が十六夜の足首をちょんっと突っつくと。

「い、痛い」

と十六夜の可愛ら、痛そうな声が聞こえた。

「ほら、俺が担いでやるよ」

そう言って俺は十六夜を抱き上げる。左手を膝の裏側あたりに、右手で肩のあたりを持つ。そして気がついた。何でお姫様抱っこし

てんだ俺、普通におんぶでよかっただろ。だが、考えてもしかたない。これでおんぶに変えようとすると十六夜の足はいたくなるだろう。痛そうな十六夜の顔を見るか、みんなに見られて恥ずかしい思いをするか。そんなの決まってる恥ずかしい方がまだマシじゃないか。

そして俺はそのまま学校へ行き、有名な俳優並みに注目された事だろう。

君の友達なＭＯＢキャラと自分の友達な剣道部員

「で、結局のところはどうなのぉ～？」

「へっ、なにが？」

あのあとからずっとこんな感じです。みんな多分僕が抱っこされてた事を聞いてるんだと思う。

「今朝の事よ～、ひょっとして出来ちゃったの？出来ちゃったの？」

「ちっ、違う。朝ボクが足を捻挫したからそれで・・」

「で、そんな優しい王子様に夕姫ちゃんは惚れちゃったの？」

「ほ、惚れてないっ」

どうしてみんなそんな意地悪なんだろう。でも、前と違って何故か少し楽しいような気がする。

「でも、坂上君って大変だねぇ。あれでいて凄い人気だから」

「どの位？」

ボクが聞くとさっきから聞いてきた人、水無月　薫さんが顎に指を当てうーんやっている。

「えっと、彼に好意を持ってるのは結構いるらしい。詳しくは知

らないなぁ。でも夕姫ちゃん、私は応援してるから頑張って心を奪っちゃえ」

「だから、ボクはぁ〜〜」

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

昼食時、昨日はいろいろあったので教室で食べている。何故か何時の間にか十六夜に友達が出来ていてそいつも一緒にいる確か水無月　薫だったかな？それと昨日は風邪で休んでいた楓もいる。

「しっかし、十六夜まだ足腫れてんのか？」

俺は十六夜の足を少し触ってみると十六夜が「あっ」と言って顔を少し赤くした。

「あ、痛かったか？」

「ううん、大丈夫」

その後少し沈黙が続くがそれを破ったのは楓だった。

「で、どうするんじゃ？今度の日曜はみんなで買い物にいくという話じゃったが水無月と十六夜も来るんか？」

「あっ、私いくよぉ〜夕姫ちゃんはどうするの？」

水無月はもう楽しみそうだ。

「ボクはどうしよう、坂上君は行くの？」

「俺？俺も行「ボクも行く」

ってはや。でもなんで俺がいるかどうかで決めたんだ？あぁ、一番気楽に話せるからか。

「じゃぁ、とりあえず慎二。そこの不良を叩き起こしておくれ」

楓はどうやら、優作の事を言ってるようなので俺は「おっけー」と言って本当に殴ったら。

「ぶぐほっ」

と、優作が起きた。

「じゃぁ、次の日曜に駅に１０：３０に集合じゃ。慎二は十六夜をおぶってやれや」

マジかよ、決定事項ですか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6151y/

ボクな君と俺な自分

2011年12月5日23時51分発行